『千葉大学　ユーラシア言語文化論集』17（2015）：47 － 54

アイヌ語十勝方言における自他同形動詞に関する一考察

小林美紀

キーワード：アイヌ語、有対動詞、自他同形動詞

1.　はじめに

アイヌ語の自他同形動詞は非常に数が限られているが、筆者は小林(2014)においてアイヌ語鵡川方言および浦河方言には有対動詞から自他同形動詞へと変化した可能性のある語が確認されることを指摘した。小林(2014)では 1910 年代から 1920 年代生まれの方の鵡川方言および浦河方言のデータを使用した。そして、鵡川方言および浦河方言においてそのような語が確認されるのは、地域的な特徴という可能性の他に話者の年代による特徴という可能性が考えられることを述べた。本稿は鵡川や浦河から離れた地域のアイヌ語を取り上げ、同様の現象がみられるかを考察することにより、これらの可能性を検討するものである。

2.　鵡川方言および浦河方言にみられる自他同形動詞

鵡川方言と浦河方言では有対動詞から自他同形動詞へと変化した可能性のある語がある。まずは有対動詞についてみていく[1]。

2.1. 有対動詞の派生タイプ

有対動詞は、自他対応の形式的関係からいくつかのタイプに分けられる。国立国語研究所(2014)は有対動詞の派生型として５つの形式的関係のタイプを挙げている。以下、その派生型についての表を引用する(表１)。

表 1.　国立国語研究所(2014)で示されている５つの形式的関係のタイプ

派生の方向の有無	派生型	自他動詞対間の形式的な関係
派生の方向あり	A　(Anticausative)	他動詞が無標→自動詞が有標：自動化・反使役化型
	C　(Causative)	自動詞が無標→他動詞が有標：他動化・使役化型
派生の方向なし	E　(Equipollent)	自他動詞ともに有標：両極型
	L　(Labile)	自他動詞ともに同じ形式：自他同形型
	S　(Suppletive)	自他動詞ともに無標・異形：補充型

[1] 本稿での鵡川方言および浦河方言に関する言及は小林(2014)で指摘したものである。

2.2. 鵡川方言の有対動詞

鵡川方言の有対動詞は形態的観点から分類すると、4 種類確認される。また、派生のタイプは 3 種類である(表 2)。

表 2. 鵡川方言の有対動詞

	自動詞	例	他動詞	例	派生型
A	**√-ke** **√-se**	mesk　欠ける komkomse 縮む	**√-V　√-pa**	mesu　mespa　～を削り取る komo ～を折りたたむ	E
B	**√**	tuy　(くっついていたものが切れて)落ちる	**√-V　√-pa**	tuye　tuypa　～を切る	C
C	**√**	sat　乾く	**√-ke**	satke ～を乾かす	C
D	**√-ke**	cakke 開く rewke 折れ曲がる	**√-V** **√-ke**	caka ～を開ける cakke　～を開ける rewe　～を折り曲げる rewke　～を折り曲げる	E L

2.3. 鵡川方言の自他同形動詞

鵡川方言では「語根に-ke が接尾した形が自動詞、なおかつ他動詞であり、それとともに、語根に-V が接尾した形も他動詞」というタイプの動詞がある(表 2.D 類)。これは、「語根に-ke あるいは-se が接尾した形が自動詞であり、語根に-V あるいは-pa が接尾した形が他動詞」というタイプの動詞(表 2.A 類)と形態的な共通性がある。また、A 類の動詞は複数あるのに対し、D 類に該当するとみられる動詞は、表に挙げたもののみと限られている。このことから、D 類は A 類から変化した可能性があるとみられる。つまり、もともと語根に-ke が接尾した形が自動詞であり、語根に-V が接尾した形が他動詞であったが、語根に-ke が接尾した形も他動詞として使用されるようになった可能性がある。

一般に自他同形動詞は、大きく分けて二種類に分けられることが知られている。一つは自動詞主語と目的語が一致する S=O タイプであり、もう一つは、自動詞主語と他動詞主語が一致する S=A タイプである。鵡川方言で確認される D 類の自他同形動詞は S=O タイプである。

2.4. 浦河方言の自他同形動詞

浦河方言の有対動詞については全体像が把握できるような形にはなっていないが、次のような自他同形動詞が確認される(表 3)。これらの自他同形動詞も S=O タイプである。

表 3. 浦河方言の自他同形動詞

自動詞	意味	他動詞	意味	派生型
rewke	折れ曲がる	rewke	～を折り曲げる	L
noyke noye	ねじ曲がる	 noye	 ～をねじ曲げる	E L

rewke は派生型 L タイプのみ確認されているが、noyke/noye は E タイプと L タイプが同時に確認され、浦河方言においても鵡川方言同様に、有対動詞から自他同形動詞へと変化した可能性のある語があるといえる。このことから両方言において自他同形動詞となるのは、語根に-ke が接尾した形が自動詞であり、語根に-V が接尾した形が他動詞である有対動詞が想定されるが、鵡川方言では自動詞の形態が他動詞としても機能するようになったと考えられるのに対し、浦河方言においてはその他に他動詞の形態が自動詞として機能するようになったと考えられる場合がある。

3. 十勝方言でみられる S=O タイプの自他同形動詞

十勝方言においても S=O タイプの自他同形動詞が確認されるかを公刊資料を用いて調査した。用例収集に用いたのは北海道教育庁生涯学習部文化課編(1996, 1997, 1998)である。

その結果、S=O タイプの自他同形動詞である語として patke「散らばる、～を散らばす」、またその可能性のある語として tuy「～を切る」が確認された。この二語は安東ウメ子氏の資料で確認されたものである。安東氏は 1932 年のお生まれである[2]。

本稿では patke 及び tuy の二語がより上の世代のアイヌ語ではどのように現れるかをあわせてみていく。上の世代の方の資料として沢井・田村編(2005)を使用した。この資料の話者である広野ハル氏は 1884 年のお生まれである[3]。

3.1. patke

安東氏の資料では patke は自動詞の例と他動詞の例が確認される。以下に挙げる(1)は自動詞の例であり、(2)(3)は他動詞の例である[4]。

[2]北海道教育庁生涯学習部文化課編(1996)による。
[3]沢井・田村(2005)による。
[4] 本稿で挙げる用例の日本語訳は出典を参考に引用者が付けたものである。また、表記は引用者が統一し、人称接辞は＝で区切って示した。

(1) upun patke.
吹雪 散らばる
吹雪く。

[北海道教育庁生涯学習部文化課編 1998：113]

(2) set or ta okkay as wa ninum patke.
檻 ～のところ に 男 立つ ～して どんぐり ～を投げる
檻に男が立ってどんぐりを投げた。

[北海道教育庁生涯学習部文化課編 1996：150]

(3) una patke na.
灰 ～を散らばす よ
灰をかけなさい。

[北海道教育庁生涯学習部文化課編 1996 : 101]

一方、広野氏の資料においては patke は 5 例確認されるが、いずれも以下に挙げる(4)のように自動詞として機能している。

(4) apepir patke
火の粉 飛ぶ
火の粉が飛ぶ。

[沢井・田村 2005 : 56]

そして、これに対応する他動詞として広野氏の資料では patu という形が確認される。

(5) cikir ari suma patu wa sinot.
足 ～で 石 ～を飛ばす ～して 遊ぶ
足で石を飛ばして遊ぶ。

[沢井・田村 2005 : 292]

安藤氏の資料中に現れる patke は自他同形動詞として機能しているが、より上の世代である広野氏の資料中では patke は自動詞であり、対応する他動詞として patu が確認される。このことから、もと

もとは語根に-ke が接尾した形が自動詞であり、語根に-V が接尾した形が他動詞という派生型 E タイプの有対動詞であったが、語根に-ke が接尾した形が他動詞としても使用されるようになり、自他同形動詞へと変化した可能性が高いといえる。

3.2. tuy

安東氏の資料では tuy は他動詞として確認される。

(6) apehuci　sirsum enkota hontom　tuy　nankor.
火の神様　地震　早く　～の途中　～を切る　しなさいよ
火の神様、早く地震を途中で切って下さい。

[北海道教育庁生涯学習部文化課編 1998：114]

また、安東氏の資料中で tuy の重複形と考えられる tuytuy が、日本語文中で現れる例が確認された。「トーキビや豆、ヒエの殻をトゥィトゥィ tuytuy(飛ばす)とき」(p. 89)のように現われ、tuy 同様に他動詞として機能しているとみられる。

一方、広野氏の資料においては tuy は 16 例確認されるが、いずれも以下に挙げる(7)(8)のように自動詞として機能している。

(7) tus apur　wa　nani　tuy.
綱　弱い　～して　すぐ　切れる
綱が弱くて、すぐ切れる。

[沢井・田村 2005 : 311]

(8) niham tuy.
葉　落ちる
葉が落ちる。

[沢井・田村 2005 : 176]

そして、tuy に対応する他動詞として広野氏の資料では tuye という形が確認される。

(9) yasay ku=hunpa　　akus　　ku=teke　　ku=tuye.

野菜　1.S＝～を刻む　～すると　1.S=～の手　1.S=～を切る

私は野菜を刻んだら手を切った。

[沢井・田村 2005 : 239]

また、この重複形 tuytuye も他動詞である。

(10) kiseri pas　oka en　　tuytuye.

煙管　灰　炉　～へ　～を落とす

吸殻を炉の中へ落としなさい。

[沢井・田村 2005 : 248]

tuy は安藤氏の資料中では他動詞の例が確認され、自動詞の例は確認できていないが、広野氏の資料中では自動詞であり、これに対応する他動詞として tuye が確認される。このことから、語根そのものが自動詞であり、語根に-V が接尾した形が他動詞の派生型 C タイプの有対動詞であったが、語根そのものの自動詞の形態が他動詞として使用されるようになったと考えられ、tuy も patke 同様に有対動詞から自他同形動詞へと変化した可能性がある。

4.　考察

十勝方言においても鵡川方言・浦河方言同様に S=O タイプの自他同形動詞及びその可能性のある語が確認された。そして、それらをより上の世代の言葉と比較した結果、もともとは有対動詞であったものが、自他同形動詞へと変化した可能性が高いとみられる。つまり、これは比較的最近生じた言語変化である可能性がある。鵡川方言・浦河方言と比較すると、鵡川方言・浦河方言において自他同形動詞へと変化した可能性のある有対動詞は派生型 E タイプであったのに対し、十勝方言においては E タイプと同時に C タイプも観察されるという点に違いがみられた。

以上のことから、S=O タイプの自他同形動詞が十勝方言、鵡川方言、浦河方言で確認されるが、これは方言的特徴という可能性より話者の年代による特徴である可能性がより強く示される結果となった。

略号

1：First person　S：Subjective

参照文献・参照ウェブサイト

国立国語研究所 (2014)『使役交替言語地図』（http://watp.ninjal.ac.jp）

小林美紀(2014)「アイヌ語鵡川方言の有対動詞」『千葉大学ユーラシア言語文化論集』16:199-215

沢井春美・田村すゞ子編(2005)『アイヌ語帯広方言の資料 ： 田村すゞ子採録 広野ハルさんの基礎語彙調査資料』札幌学院大学

北海道教育庁生涯学習部文化課編(1996)『平成７年度　アイヌ民俗文化財調査報告書（アイヌ民俗調査ＸＶ　補足調査２）』北海道教育委員会

北海道教育庁生涯学習部文化課編(1997)『平成８年度　アイヌ民俗文化財調査報告書（アイヌ民俗調査ＸⅥ　補足調査３）』北海道教育委員会

北海道教育庁生涯学習部文化課編(1998)『平成９年度　アイヌ民俗文化財調査報告書（アイヌ民俗調査ＸⅦ　補足調査４）』北海道教育委員会

(こばやしみき・千葉大学人文社会科学研究科／国立国語研究所プロジェクト非常勤研究員)

A Study of Labile Verbs in Tokachi Dialect of Ainu

KOBAYASHI Miki

Summary:

In this paper, I pointed out that there are labile verbs of S=O type in Tokachi dialect of Ainu. They may have been changed from a Paired Verb to a labile verb. And I suggest that this phenomenon is a recent linguistic change.